

現場で働くプロに聞く

## Good Job!!

グッジョブ!!



さいとう てるよ

齊藤 輝代 さん(古閑) 職歴7年

56歳の時に作家になることを決心し、翌年に国語教師を退職。熊本県近代文学館(現:くまもと文学・歴史館)文章勉強会の門を叩き、本格的に勉強を始めた。平成26年に「齊藤てる」のペンネームで熊本県民文芸小説一席を受賞した。

教師からの転身だが、齊藤さんは「職歴はあまり関係ない」ときっぱり。「全ての人が作家になれます。大切なことは書くことが好きかどうか。

「この表現は全然ダメ」「ここはこう書いた方がよい」など、物書きの仲間うちでは辛口の批評が飛び交うこともしばしば。そのことを齊藤さんは「ありがたい」と言う。「決して遠慮はしません。深く読んだからこそ批評ができるし、褒めるだけでは気付けないこともある。いただいた批評を自分の中で昇華することで、ひいてはそれが自分の成長に繋がります。作家を目指す人は、人の批評を恐れない心を持ってもらいたいですね。

作家として一番達成感を味わえる瞬間は、完成を意味する『了』の字が入った時。「書き終わった!」と思うとすごくうれしくなります。その日の夜は自分でお祝いしたいほどですね」とにっこり。

文章上達のための効果的な勉強法は“書き写すこと”という。「自分の好きな文章を真似をして書いているうちに、その文章が持つリズムや息遣いが身体に染みついてきて、知らず知らずに深みのある文章が書けるようになってきます」。

「矢嶋家四賢婦人の歴史小説を世に出したい」。現在の齊藤さんの目標だ。同郷の偉人らの半生を書き綴ることに使命を感じているという。作家になって2年目に一度、竹崎順子にスポットを当てた小説を書いた。世間の批評を鑑みて「自分の中でこの題材を熟成させたい」という思いに駆られた。そして今年、満を持しての挑戦となる。「書きたい題材はまだまだたくさん。忙しさはありますが、とても人生を楽しめています」。

「百年の綿菓子」 齊藤てる/著 平成27年10月20日 この本に関する問い合わせは ☎286-3605(齊藤)まで